秦野市青少年指導員だより

第43号

発行／秦野市青少年指導員連絡協議会　編集／秦野市青少年指導員連絡協議会広報委員会

子どもたちと手を携えて作る明日

私たち青少年指導員は、未来を担う子どもたちがより健やかに成長していくことを願い、一年間を通して、地域の様々な行事や活動を支えています。

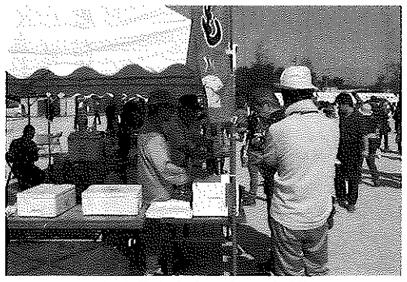
今回は、大根・鶴巻地区における地域と力をあわせた取り組みとそこでの中学生の活躍ぶり。また四十年以上の歴史を持つ本協議会の文化的事業「大型紙芝居」と「影絵」の活動について紹介します。

「大根ふれあいまつり」での紙工作指導

地域全体で取り組む子ども育成の試み

大根・鶴巻地区の指導員は、地域の子どもたちを支える様々な団体や組織、学校と連携を取りつつ、活動を展開しています。

主立ったものを挙げると、子ども会育成連絡協議会が主催するドッジボール大会での審判協力に、同じく表丹沢野外活動センターでの一泊二日の「サマーキャンプ」における野外活動およびゲーム指導。



「鶴巻市民ふれあいまつり」模擬店

社会福祉協議会主催の大根・鶴巻両地区の「ふれあいまつり」における、模擬店の出店と工作教室開催。

学校と連携しての「鶴巻子ども園サマーフェスティバル」や「大根小PTAふれあいバザー」での紙工作指導。

鶴巻公民館「親子ふれあいそうめん流し」

公民館関係では「親子ふれあいソーメン流し」での竹容器・竹箸作り指導に、「鶴巻児童館クリスマス会」でのキャンドル・ファイヤー運営。

と、盛りだくさんです。

三とおりの「あそぼうかい」

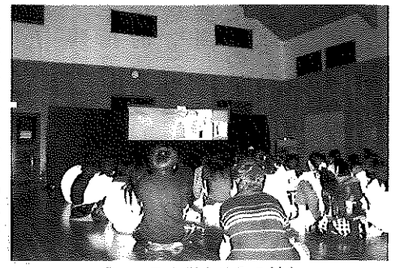
さらに、大根・鶴巻地区には三つの「あそぼうかい」があります。

の経緯をお話ししたところ、快くご協力をいただくことが出来ました。また効果音・BGMは、秦野曽屋高校吹奏楽部OBの方にお力をお借りしました。

声優は指導員自身が担当し、素晴らしい音源CDを完成させることが出来たのです。

公演演目

まず復活させた演目は、「一つ目小僧とせえの神」。やはり岩田達治先生の『丹沢山麓秦野民話』からいただいた、年の暮れからお正月にかけての道祖神をめぐるお話です。



「一つ目小僧とせえの神」

三年前から、市の交流キャンプや公民館行事の際、また幼稚園や小学校に呼ばれて公演しています。影絵独特の淡く暖かい色調が子どもたちには新鮮に映るのでしょうか。みんな食い入るようにして見てくれています。

一演目だけでは寂しいと、今年度からは、本町地区の天徳寺にまつわるお話「血を吹くさんご樹」を復活させました。

世代を越えて

せっかく復活させた活動が継続していけるようにと、昨年から「影絵サークル」として、青少年指導員を退任された方も参加できるよう組織変えをしました。

また、発表の場を広げるべく、昨年度三月の全体会の席に、市内各小学校の先生方をお招きし、ご披露しました。

現在メンバー総勢十七名。

なんとか平日の公演依頼にも対応できるようになりました。毎月一回本町地区の元委員の方のスタジオを使い、練習しています。

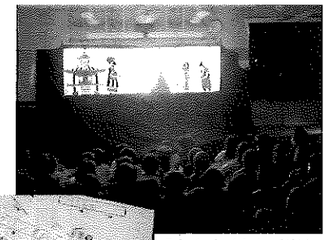
先日人づてに聞いたと言って、若いお母さんが娘さんを連れ、スタジオに見学に来られました。

小さいとき、学校で影絵を見た。その時受けた衝撃が忘れられない。だから、娘にも見せてやりたいと思って伺ったのだと。

お二人で「血を吹くさんご樹」のクライマックスをご覧になり、大満足の様子で帰っていかれました。

そういった経緯もあって、この十月二十四日（水）朝八時半から、末広小学校で一年生と二年生を対象に行った二公演は、感慨深いものがありました。

「人形操作の再確認」



「血を吹くさんご樹」

末広小学校児童の感想

何人もの子が、ラストの場面に「びっくりした。」と感想につづっていました。そして「あんなにおおぜいの人がやっていたのにびっくりしました。」とも。

こうして引き継がれていくのだとしたら、どんなに嬉しいことか。

終演後のスタッフ挨拶

児童を待つ舞台裏

神奈川県青少年指導員大会

十二月二日（日）、横浜市横浜関内ホールで第四十五回神奈川県青少年指導員大会が開催され、昨年まで四年間本協議会の会長を務められた中津川重光氏（西・上地区）が、七期十四年の長きにわたる指導員としての功績を讃えられ、優良指導員として表彰されました。おめでとうございます。

第45回
神奈川県青少年
指導員大会

優勝指導員の中津川さん

広報委員

幡井康雄（本町）
林　良子（本町）
堂田輝美（南）
溝口雅之（南）
久保光弘（東）
岩本　正（北）
西村　浩（大根）
本多勝昭（鶴巻）
吉田トシ子（西・上）
米山　恵（西・上）

一つ目は、中学校区の子どもを育む会が、年に三回実施している「遊ぼう会」。中学生がリーダーになって、小学生と一緒に遊びます。

次に、社会福祉協議会が主催する「夏休みあそぼう会」。今年は、幼児・小中学生・保護者、合わせて五百人以上の人が集まり、盛大に行われました。

そしてもう一つ、季節毎の行事以外に、普段の生活の場面で子どもたちと接する機会を持ちたいと、私たち指導員が始めた取り組みがあります。地域の児童ホームと連携して毎月二回、平日の午後に伺っては、子どもたちに紙工作やスポーツ・ゲームで、「あそぼうかい」と声をかけています。

大人、中学生、幼児・児童三者による互恵関係

右に紹介した今年の「夏休みあそぼう会」に、私たち青少年指導員は、「手作りおもちゃ」ブースで参加しました。来店した子どもたちに、竹とんぼ・紙風船・風車といった五種類のおもちゃを作ってもらいます。

応援に来てくれた十名の中学生をそれぞれの担当に振り分け、作り方を伝え、指導をお願いしました。

はじめは少し戸惑った表情を見せていましたが、要領をつかんでからは、みな本当に上手に、指導に当たってくれました。

作り上げた小学生の喜ぶ顔に接した時の満足げな表情、またもどかしい幼児の手つきに思わず口出ししたくなるのをぐっとこらえている表情が、印象的でした。

「鶴巻子ども園サマーフェスティバル」盆踊り

こういった日常では体験できない活動を通して、中学生たちは、きっと様々なことを学んでいっているのでしょう。

そういった彼らの活動の様子を、六月四日におおね公園多目的広場で開かれた、今年の第一回「遊ぼう会」から紹介したいと思います。

「遊ぼう会」スタート

工夫を凝らした遊び

鶴巻中学校から約五十名の中学生が参加してくれました。手際よく、百五十名に近い小学生をグループに分け、リードしていきます。「けいどろ」「ドッジボール」「長縄跳び」の三種目で楽しみました。

「けいどろ」は刑事と泥棒の略で、参加者が半数に別れ、隠れた「どろぼう」役を「けいじ」役が追いかけます。かくれんぼと違って、泥棒は見つかっても刑事にタッチされるまでは逃げられ、また捕まった後も仲間に助けてもらえるといった具合に、少し複雑ですが、中学生のお目付役がいるおかげで、混乱することなく進行していました。

「長縄跳び」も、中学生が思い切り回してくれます。

「長縄跳び」

「ドッジボール」は、低学年の子どもたちには柔らかめで一回り大きなソフトドッジボールを使い、より楽しく、安全に遊ぶことができました。

中学生の活躍

運営に当たっては、中学生が自主的に各ゲームの指導に当たりました。ペットボトルの水でラインを引いたり、審判をしたり、大きく外れたボールを拾ったりと、大活躍でした。

会終了後も、率先して全員でトンボ等の道具を使い、グラウンドを清掃・整備してくれ、気持ちよく解散することができました。

さらに明日に向けて

青少年指導員として、ゲームの進行の手助けと安全面には心を配りましたが、実際、ほとんど見守っているだけといった感じでした。

地域の様々な活動を通していろんな人に支えてもらった彼らが、今度は何か人にしてあげる立場になった。その自分のできることを、後に続くみんなのために精一杯やってくれている。

そんな中学生の姿を心強く思いました。彼らの持つ可能性をもっと伸ばしてやりたい、そう思います。

リードする中学生

大型紙芝居と影絵でつなぐ秦野の民話

現在、私たち秦野市青少年指導員連絡協議会は、文化的活動として「大型紙芝居」と「影絵」の二つの事業を展開しています。どちらも、秦野の子どもたちに、もっと秦野について知ってもらいたいという思いから、私たちの先輩指導員の方々がスタートさせた企画です。

大型紙芝居

大型紙芝居は、秦野市の民話研究家岩田達治先生の『丹沢山麓秦野民話』から原案をいただき、指導員自らが脚色し、絵コンテ、プチ紙芝居作りを経て完成させたものです。

単に大型なだけではありません。絵の具以外にワラや毛糸、木の皮や厚手の紙などを使い、また子どもたちを驚かせる立体的な仕掛けも組み込まれています。そのため、一作品を仕上げるのに二年近くかかるという遅々とした歩みでしたが、年月を重ねた今、「そばの根はなぜ赤い」「やきめしころころ」「水無川と弘法山」の三作品を所有しています。

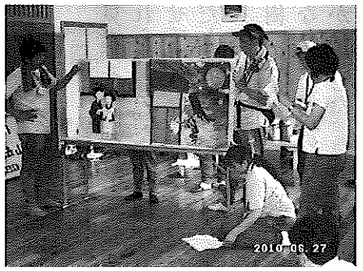
「そばの根はなぜ赤い」

「そばの根はなぜ赤い」演目を聞いただけで、蕎麦の根っこが赤くなってしまった理由を知りたくなってきませんか。実は、そこには思いもよらない事件があったのです。

そして秦野に住んでいる以上、水無川と弘法山のいわれについて知っておきたいですよね。

子どもたちは、まずその絵の大きさに引き込まれます。そしてお話しが進むにつれ、次にめくられる場面を想像して胸ときめかせている様子が、読み手であるこちらにも伝わってきて、思わず嬉しくなります。

公民館や児童館等の行事の際には、ぜひ各地区の青少年指導員にお声をおかけください。スタッフ数名ですぐに駆けつけられるのが、この大型紙芝居の特長の一つです。


上演に向けての研修風景

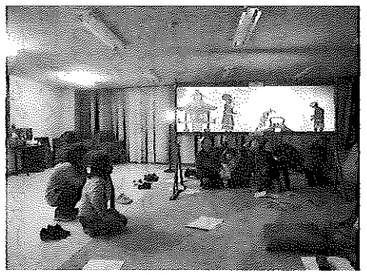
影絵を上演するには

影絵は暗幕、舞台、スクリーン、ライトと大がかりな機材と設営を必要とします。

また上演には照明、人形操作担当と多くの人数を必要とすること、さらに細かい人形の操作にかなりの熟練が求められます。

そのため、大型紙芝居と同じく三十年以上の歴史を持ちながら、こちらはいつしか、継続的な上演が難しくなってしまいました。

せっかくの機材も、今世紀に入ってからは、こども館の倉庫に眠ったままになっていたのです。


再上演に向けて

灯りの持つぬくもりを

それをもう一度甦らそうとしたのは、デジタル万能の時代に育つ子どもたちに、昔ながらの灯りが持つぬくもりや優しさを伝えたいという、研修を担当する多くの指導員の思いでした。

ただ、如何せん、台本が出来てから三十年以上の時間が経っています。この間、沢山の方が新たに市外から秦野に移り住んでこられました。作品の中で重要な役割を果たす「めけえご」や「道祖神」、「どんど焼き」や「木の幹のうろ」といった言葉は、多くの子どもたちにとって身近なものでなくなっています。

台本を一から書き直す必要が生まれました。ただし、秦野弁の良さだけは、努めて残したいと心がけました。

アナログとデジタルの融合

影絵は会場を暗くするために、台本をその場で読むことが出来ません。上演に当たっては、当初からカセットテープに録音した音声を用いていました。

暗転の時間調整や音楽の挿入、人形の操作に合わせた細かいナレーションの調整等のために、ぜひデジタル録音が出来ないものか。

パート毎に音源収録

渋沢で舞台・イベントの運営、音響制作等で広く事業を展開されている株式会社サウンドダックさんに、この間